

「魂」の方へ

—Robert Bly と「イメージ」—

松 田 寿 一

はじめに

アメリカ詩人 Robert Bly (1926-) は 1990 年代初頭に出版された *Iron John* (邦題『アイアン・ジョンの魂』) やその後の *The Sibling Society* (邦題『未熟なオトナと不遜なコドモ』) の著者として、さらにメンズ・リヴ (男性解放運動) の代表、ヴェトナム戦争、イラク戦争などの反戦詩人の一人としてもよく知られる。こうした一連の社会的・文化的・政治的活動の根幹には現代アメリカにおける精神世界の回復という Bly の意思が存在する。例えばグリム童話の「鉄のハンス」を素材にした *Iron John* においては、男たちの奥底に眠る「真のエネルギー、直接的な手触りのある生の蘇生」が、また *The Sibling Society* では、アメリカ社会で「真の意味で大人になり、内面的に成長する道の模索」が主題となるが、どちらにおいても西洋近代以降の社会の中で陰に追いやられてきた「魂」(soul) の場への深い関心が示されている。他方 Bly と言えば、*The Norton Anthology of Modern and Contemporary Poetry* (2003) が “Robert Bly is a prime mover of what came to be known as the Deep Image school” (370) と紹介するように、“Deep Image” (ディープ・イメージ) の詩の主たる推進者としてアメリカ詩に大きな影響を与えてきた詩人である。もっとも “Deep Image” という語自体は、民族詩学

(Ethnopoetics)の主唱者で数々のアンソロジーの編纂者としても知られる Jerome Rothenberg (1931-) や詩誌 *Trobar* の編集者で詩人の Robert Kelly (1931-) が 1950 年代末から 60 年代初頭に使い始めたものであり、Bly 自身も自らが抱くイメージ観に “Deep Image” という呼称が与えられることを必ずしも本意とはしなかった (*Talking* 258)。しかし、一般には「Bly の “Deep Image”」がアメリカ詩における “Deep Image” の詩の動きとして認知されていく。80 年代末、Bly は “What the Images Can Do” と題するエッセイで、「近年のイメージ偏重の傾向には自身にもその責任がある」と述べながらも、詩における「イメージ」の重要性を再確認する (*American Poetry* 278)。本稿では Bly が強い関心を注いできた「イメージ」の意味を彼の詩的活動の根底にある精神性との関わりから考えてみたい。

1 Bly の “Deep Image”

英米詩についての一般向けの紹介書 *The Norton Anthology* は詩史上に “the Deep Image school” (ディープ・イメージ派) を明確に位置づけた上で、彼らを “neosurrealists who used images to gain access to unconscious or spiritual levels of experience” と呼び、“Bly speaks of the ‘underground image’; his poetry can be thought of as an underground or, better, a mystical imagism.” (370-1) と説明を加えている。「無意識的でスピリチュアルな経験へと導くイメージ」「ネオ・シュールレアリスムや神秘主義的イマジズム」といった性格を有する詩を志向する(した)詩人としては他に W.S. Merwin, James Wright, Galway Kinnell, Mark Strand, James Tate, Charles Simic など日本でもよく知られる詩人たちの名をあげることができる。さらに Louis Simpson、William Stafford などにもこうした傾向の作品は見うけられる。

しかし、Rothenberg が “I have a feeling something is being born

today (or-reborn). [...] The thing I felt ‘being born’ was an American poetry of the ‘deep image’” (*The Sullen Art* 28) と語ったように、50年代末、詩の諸相に「イメージ」を前景化させたのは Bly 周辺の詩人たちだけではない。70年代に編集された大部のアンソロジー *America a Prophecy* の中で “Deep Image” に解説を与える際に Rothenberg はそうした事情を明らかにする。

DEEP IMAGE: Late fifties, early sixties: one response to the re-opening of American poetry at this time was a new consideration of “image” as a power latent in all poetry and thought. Attention to “deep image” (derived from Spanish and French Surrealism, archaic and primitive poetry etc.) centered in magazines like *Trobar* (ed. Robert Kelly and George Economou) and *Poems from the Floating World* (ed. Jerome Rothenberg), while related concerns with “image” informed Robert Bly’s *Fifties* and *Sixties*. Kelly’s concern with a synthesis of “deep image” and “projective verse” marks one difference between the former and the latter. (448)

ここには “Deep Image” についての一般的理解に修正をうながす記述がなされている。Rothenberg によれば、モダニズムの革新後、50年代初頭まで閉塞状態にあったアメリカ詩における新たな可能性としての “Deep Image” は、2つのグループ、3つの雑誌を軸に推進された。ひとつは Kelly らによる詩誌 *Trobar*、Rothenberg 主宰の *Poems from the Floating World*、そしてもう片方は Bly の *The Fifties*、*The Sixties* であった。さらに Rothenberg は、この2つグループの “Deep Image” に対する認識には微妙な違いが存在しており、その一端は Kelly が “Deep

Image”と“Projective Verse”「投射詩論」との統合に関心を向けていた点だと示唆している。こうした初動の“Deep Image”に対する捉え方の相違や共有部分についての検証は、「Bly の“Deep Image”」の意味に別の角度から光をあてることになるとともに、それぞれの詩人たちのその後の活動とも関わる問題であり、改めて取り上げる必要があるだろう。

ともあれ、Bly の“Deep Image”との遭遇は *The Fifties* Vol. 2 に掲載された“On English and American Poetry” (1959) においてである。

Both (= poets in the universities and poets in Los Angeles and San Francisco) are as far from the modern tradition of the deep images of the unconscious as possible. [...] They are as far from the French tradition of Rimbaud and Eluard as could be imagined, which is also a tradition of the deep images of the unconscious. (47, emphases added)

この時期の詩論やインタビューの中で Bly が目指したのは Eliot、Pound、Williams による英米系モダニズムの客観主義的で知的な伝統の影響下にあった 50 年代のアメリカ詩に感情・直観・本能、そして内面性を重んじた欧州のモダニズムの伝統を注入することであった。Bly はさまざまな場面で、アメリカ詩がシュールレアリスム (Surrealism) を経験していないこと、Bly の言うところの内面の感情体験が欠如してきた点によって後進性もたらされたと指摘するが、この一節では Rimbaud や Eluard を引き合いに“Deep Image”が深層心理学における「無意識」から湧出するものであることを示唆している¹⁾。

しかし、詩史上でイメージという語から思い起こされるのは 20 世紀初頭のイマジズム (Imagism) とのつながりである。この点について Bly が主張するのはイマジズムの継承というよりも相違についてである。

“Some Thoughts on Lorca and René Char” (1959) において Bly は、イマジズムを単なる「絵画主義」だとして “Deep Image” と峻別しようとする。

Even the Imagists were misnamed: they did not write in images from the unconscious, as Lorca or Neruda, but in simple pictures, such as “petals on a wet black bough,” and Pound, for instance, continues to write in pictures, [...] but pictures are not images. And without these true images, this water from the unconscious, the language continues to dry up. (*The Fifties* No. 3, 8-9)

イマジストという呼び名がそもそも間違いであり、Lorca や Neruda のように意識の深層（無意識）から生み出されることのないイマジズムのイメージは Bly の言うところのイメージとは直接的関係はない。例えば、パリの地下鉄駅を出たときのぬっとあらわれた群集の顔のひとつひとつにはっとするような美を見出し、それを雨にぬれた大枝にはりついた花びらに喩えたイマジズムの代表的作品 “In a Station of the Metro”²⁾ にしろ、それは単なる絵画であり、イメージとは違うと Bly は言う。では、どのような詩における、どのようなイメージが Bly の “true images” なのか。

An image and a picture differ in that the image [...] cannot be drawn from or inserted back into the real world. [...] Like Bonnefoy’s “interior sea lighted by turning eagles,” it cannot be seen in real life. A picture, on the other hand, is drawn from the objective “real” world. “Petals on a wet, black bough” can actually be seen. (*American Poetry* 20)

多分に Eliot の「客観的相関物」を意識しての発言であるが、Bly の言うイメージは客観的世界から持ち込まれたり、現実世界に再び回収されることができない。また、Pound の “Petals on a wet, black bough” が単に可視的であるのに対して、Yves Bonnefoy の “interior sea lighted by turning eagles”³⁾ が喚起するのは外界と内界の融合がもたらす未知の世界であり、不可視とはいえ、確実に触知しうる心的現実である。別の場で Bly は陰影を帯びた複雑なイメージがもうひとつの世界の存在を暗示する Lorca の “Black horses and sinister/people are riding/over the deep roads/of the guitar” (“Malagueña” *Lorca* 113) の例もあげている。川本皓嗣がイマジズムの意義を「比喩を詩の中心に据え、全体をじかに理解する方法として比喩的、イメージ的な理解こそ重要だとした点にある」(211-20)と説明するようにイマジズムの根底には不意の連想によってもたらされた衝撃あるいは知覚による外界の変容それ自体への強い関心があった。つまりイメージに象徴性や内面性などの付加価値を持ち込まない態度、客観主義と、ある意味での禁欲性がイマジズムの精神でもあった。しかし、Bly はイメージに対して、単なるイメージあるいはメタファー以上の何かを求める。そこでは無意識の沃野から生まれ、人間の意識を超えた世界の存在を覚知させるようなイメージが重要となる。次章では実作品を通して Bly における「イメージ」と「無意識」の関係を考える。

2 Silence の世界(1)

The Norton Anthology が “Bly speaks of the ‘underground image’” とした “underground image” にかなう Bly の短詩を例示すればおそろく次のような作品であろう。

An owl on the dark waters

And so many torches smoking
By mossy stone
And horses that are seen riderless on moonlit nights
A candle that flutters as a black hand
Reaches out
All of these mean
A man with coins in his eyes

The vast waters
The cry of seagulls. (“Riderless Horses” *Light* 58)

この詩を収める Bly の第 2 詩集 *Light Around the Body* (1968) には 60 年代アメリカの政治や社会の暗部をシュールレアリスティックな手法で映し出した作品が多く含まれているが、Ekbert Faas が評したように、この短詩に漂う “the phantasmagoria of the subconscious with comparable convincingness and magic” (203) は英米圏では稀であった⁴⁾。しかし、感覚世界を通して内面の深層あるいは古層を言語空間へと浮上させる表現はしだいにアメリカ詩にも浸透する。この詩には Kelly が “Deep Image” の特性について “the image, after its first appearance as dark sound, still lingers as a resonance” と形容したような Lorca の ドゥエンデ (duende) を連想させる暗い響きの表出が認められる。また Kelly が “demonstrations of the fruitfulness of the approach to the poem via deep image” (*Trobar*) と記した Rothenberg の処女詩集 *White Sun Black Sun* (1960) の世界にも通底するだろう。しかし “Riderless Horses” に先行する詩集 *Silence in the Snowy Fields* (1962) の最終頁に収められた “Snowfall in the Afternoon” はそのような世界と隣接しながらも、単にイメージを提示するだけではなく、ひとつの「イメー

「ジ体験」とも言うべきプロセスが点描される。全体が4つのセクションに区切られたこの短詩は Bly のイメージ・メイキングの好例であるとともに、Bly にとってのイメージの意味を多面的に映し出す作品である。

I

The grass is half-covered with snow.
It was the sort of snowfall that starts in late afternoon,
And now the little houses of the grass are growing dark.

II

If I reached my hands down, near the earth,
I could take handfuls of darkness!
A darkness was always there, which we never noticed.

III

As the snow grows heavier, the cornstalks fade farther away,
And the barn moves nearer to the house,
The barn moves all alone in the growing storm.

IV

The barn is full of corn, and moving toward us now,
Like a hulk blown toward us in a storm at sea;
All the sailors on deck have been blind for many years. (*Silence* 60)

ミネソタの農場で生まれ育ち、ニューヨークでの都会生活後、故郷に戻り、農場労働に携わりながら詩作を続けた Bly の生活がこの詩の背景にある。一見、何の説明も要しない素朴な言葉で書かれた詩であるため

に、背後に存在するモノの気配や感情の高まりが伝わるかどうかがこの詩の評価の分かれ目になるだろう。この詩を支配する brooding な気分は I の “It was the sort of snowfall that starts in late afternoon” の「例の雪だな」という語り手の呟きから伝えられていく。「小さな家」とは雪によって草がしなだれ、陰の部分が暗がりになって見えるということである。夜が迫りくる中で、語り手は辺りの闇を触知する。何かの内面にざわめき立ち、それとともに外界の風景が変容をとげていく。III の遠ざかるトウモロコシ畑は肉眼の世界にとどまるものの、IV では「納屋が時化にあって岸へ吹き寄せられる難破船」に喩えられ、「甲板の盲目の水夫たちの航海」はもはや内面下のイメージの現出というほかはない。とは言え、このイメージは必ずしも唐突ではない。すでに II における「かがみこんで、暗闇をつかみとる動き」は語り手の水をすくい上げる動作を連想させ、大地と水のありか（つまり海）と重層させているとも考えられるからだ。では、これらのイメージが意味するものは何か。Bly の他の詩に照らし合わせれば、単純に「無意識としての納屋」の「意識としての家」への接近と読むことも可能である。そう考えると冒頭の午後の遅い時間という設定、つまり夜と昼との、意識と無意識の境界の時間帯であること、雪が ‘half-covered’ であることも暗示的である。また納屋は家に対して豊かなものを蔵しながら片隅に置かれた存在として、みすぼらしい姿を強いられているとすればアメリカ先住民のメタファーと解する見方もありうる。

納屋＝無意識＝難破船という連結は、「夜の旅」としての「無意識の旅」と読める。となれば「盲目であること」はもはや負のものだけとは捉えられない。無意識への旅は、危険をとまなないながらも、貴重な何かに触れることが示唆されるからである。また、こうした一連の動きを促すのは吹雪のエネルギーであり、それは内面の感情 (emotion) のメタファーであろう。こうしてみると、この詩は盲目の水夫を呼び覚ますこと、つま

り私たちの中に眠るもう一人の自分、可視的な世界では覚知できない何かに感応しうるもう一人の誰かの存在を認識するという内面的世界への探究の性格を帯びることになる。

しかし、“Deep Image”が無意識への旅と深く関わるとすれば、盲目の水夫のイメージを知的に理解しようとする試みはそれ自体が矛盾したものとなる。そもそもイメージは分析的解釈を拒否するところにイメージの所以がある。無意識との結びつきを大切にすることは、人間の見えない闇の領域に入っていくことである。したがって、Blyのような詩にとって重要なのはメタファーや象徴作用によって詩のイメージを読み取るのではなく、イメージそのものの曖昧さと多義性を受けとめること、つまりイメージそのものに還る態度であろう。

ところで最終連のイメージはシュールレアリストの「痙攣的なイメージ」などと比べればいかにも地味なイメージではある。しかし、何気ない日常の風景や事物の背後に何かのを見出す点において、このイメージもまた Bly のイメージの核心に触れている。Bly はこの詩集について “a union of Rexroth and some twentieth century Spanish poets” と語っている (*Talking* 23)。アメリカの偉大な自然詩人として Bly が尊敬する Rexroth に加えて「スペイン語圏の詩人たち」からインスピレーションを受けたとすれば、Machado の “You know the secret corridors/of the soul, the roads that dreams take, /and the calm evening/ where they go to die” (*American Poetry* 4) のような詩句が意味するところを想起してのことである。「夢が導く道」は「無意識によって導かれる道」であり、「魂の秘められた回廊」のことでもある。Machado はその存在を知っていた。それゆえ、詩の中で Machado は「死へと向かう夕暮れに “calmness” を感じるのができた—“Machado’s calmness comes from the fact that he does know the secret roads.” (*American Poetry* 4)。すでに *Silence* において Bly の無意識は魂の方へと向う Ma-

chado のそれに近い。Bly は同時期に書かれた “A Wrong Turning in American Poetry” というエッセイでアメリカ詩の状況を “spiritual life” “revolutionary feeling—in either language or politics” “image” “the unconscious” の欠落によって説明したが (*American Poetry* 25-36)、その際、真っ先に掲げたのは “spiritual life” の欠如であった。*Silence in the Snowy Fields* には “spiritual life” の回復を通して “calmness” に到達する重要な詩が含まれている。しかし、その代表的な作品を取り上げる前に、「イメージ」が “spiritual life” あるいは「魂」(soul) の問題とどう接続するのかを確認しておきたい。

3 Bly における「イメージ」と「魂」

“The Dead World and the Live World” (1966)⁵⁾ の中で、「神なる自然」(Gott-natur) という概念や “news of the universe” という、いわば「自然や宇宙の側から運ばれてくる詩」の今日的重要性を説くドイツの精神医学者 Georg Groddeck に共鳴した Bly は後年そうした世界を描き出す詩のアンソロジー *News of the Universe* (1980) を出版する。さらに 1986 年の *The Winged Life—the Poetic Voice of Henry David Thoreau* (邦題『翼ある命』) は Bly の「イメージ」と精神世界、とりわけ「魂」との結びつきをより鮮明にさせた。Thoreau の日記の断章や詩に Bly のエッセイと解説を添えたこの本の冒頭で Bly は次のように語る。

He believed that the young man or young woman should give up tending the machine of civilization and instead farm the soul. [⋯] When we fight for the soul and its life, we receive as reward not fame, not wages, not friends, but what is already in the soul, a freshness that no one can destroy, that animals and trees share.

The most important word is *soul*.⁶⁾ (*The Winged Life* 3. Emphasis is Bly's)

「魂を耕す」(farm the soul) ことによって得られる「人間も動物も木々も分かち持っているさわやかさ」(a freshness that no one can destroy, that animals and trees share) とは自然との、あるいは宇宙との有機的つながりのことである。自覚的ではないにせよ、それは「魂のうちですでにある」(what is already in the soul)。人間の中に埋もれている“soul”を蘇生させること、それが生涯の事業となるべきなのだ。Thoreauにとってもっとも重要であった“soul”とは、60年代初頭のアメリカ詩においてBlyがもっとも強く求めた“spiritual life”のことでもある。

ブライは「魂」あるいは「魂の現れてくる場」を、それと互換性のあるさまざまな表現、例えばサイキ(psyche)、アニマ(anima)、内部世界(the inner world)、「不可視の世界」(the invisible world)、「もう一つの世界」(the other world)と呼んできた。ある詩句においては、それを「暗く豊かな世界」(a world, still darker, that feeds many)とも形容した。しかし、Blyが“soul”という語を使い始めるのは80年代後半から90年代に入ってからである⁷⁾。それはメンズ・リヴや詩のアンソロジーの編集などを通して共に活動することになる元型心理学者James Hillman (1926-)を知ったことが理由のひとつだが、Blyらが思い描くような意味での“soul”が認知される環境になったこともある。つまり、伝統的宗教から独立しつつ推し進められたアメリカの精神回復運動—第一波ヒューマン・ポテンシャル・ムーヴメント(1960年代)、第二波のニュー・エイジ・ムーヴメント(1980年代)、第三波の魂へのムーヴメント(1990年代)—の流れ(エルキンス 21-3)が背景にあったということである。

では、Bly にとって「魂」とは何か、また Bly が引用した Thoreau の一節と Bly のイメージとはどう関わるのか。それらを理解するためには Hillman の「魂」や「イメージ」についての議論と Bly の詩との接点を探る必要がある。

Hillman は『魂の心理学』の中で John Keats に由来する “Soul-making” という語⁸⁾ にふれて次のように述べている。

ソウル・メイキング
魂作りという術語はロマン主義の詩人たちに由来する。[...] その一句を明確にしたのは、ジョン・キーツである。彼は弟への手紙にこう書いている。「もしお好みなら世界を『魂作りの谷』と呼びたまえ。そうすれば、君は世界の利用法を見出すだろう。」このパースペクティヴからすれば、人生の冒険とは、魂作りのために世界という谷を彷徨することである。[...] 生の目的はそこから心を作ること、生と魂の間の結びつきを作ることである。(19-20)

Hillman はここで Keats が「魂とそれを作ることをこの世界の中に位置づけ、救済や神秘的な超越を目指すために、世界から出ていったり、世界を越えていったりする道を探し求めることはしない」ことを確認する。つまり伝統的な宗教とは違う場で精神性を求める姿勢である。では Hillman のいう「魂」とはどのようなものなのか。「『魂』は、形而上学的、ロマンチックな含蓄をもっていて、それは宗教と教会を共有している」（『自殺と魂』43-7）と指摘する Hillman は、一方で「『魂』は定義できるようなものではない」（『内的世界への探求』47）とも述べる。しかし、定義が難しくとも、それが失われたならばどのような事態が生み出されるかを Hillman は「魂」を喪失したケースをもって例示する。

人類学者たちは「未開」人たちの間に起こる「魂の喪失」という事

態を記述している。この状態では、人は自分自身から離れていて、人々との結びつきや、彼自身との内的結びつきを見出すことができない。彼は、その人の住む社会やその儀式、伝承されたものに参加できない。それらは彼にとって死んでも同然であり、彼はまたそれらにとって死んでも同然である。家族やトーテムや自然との結びつきは失われた。彼が自分の魂を取り戻すまで、真の人間ではなく、彼は「存在しない」。[…]けれども彼は病気にかかってもいないし、気が狂っているわけでもない。彼はただ、自分の魂を失っているだけである。(『内的世界への探求』47-8)

では現代人にとっての魂の喪失とはどういう事態なのか。Hillman は精神を病んだ患者について、彼らは社会との結びつきではなく、事物との関係を失ってしまったからだと言っている。

(精神を病んでいる)患者たちは皆、デカルトが仮想的に創造してみた、あの、擬似事物界に住んでいるんです。そこでは、ものは一様に、無機的な死物で、本来的に無意味な *res extensa* (延長を持った物体) にすぎない。患者はまさに、そのことに悩まされているんだと、私は思うんです。(河合 105-6)

事物が命をもたない物質以上の何ものでもなければ、それらとの生き生きとした関係を結ぶすべはなく、この世界に宿っているという感覚は喪失する。事物の連関は失われ、世界はもはや意味づけられたものとは捉えられず、脈絡のない断片と化す。Bly は *News of the Universe* の中で、世界との親密な関係の喪失によってもたらされた実存的な恐怖や痛みを “the Descartes wound” (デカルトが生んだ傷) と呼び、*News of the Universe* に収めた Rilke をはじめとする詩人たちの作品がその修復の

ひとつの試みだと述べる—“Rilke in this poem is describing a practical way to heal the Descartes wound” (News 251)。

一方、アメリカ人の精神的苦境の淵源としてのデカルト的精神の問題は、*Iron John* や *The Sibling Society* のモチーフともなっているが、デーヴィッド・N・エルキンスの『スピリチュアル・レボリューション』にも次のように描かれている。

西洋文化の現在の道筋は、三百年余り前、デカルトが「われ思う、ゆえにわれあり」と言ったときに固められた。[...] それ以来、西洋社会は合理的思考の祭壇で礼拝し、そして魂にほとんど注意を払わなくなった。かくして今日、われわれは精神^{マインド}について多くを語り、魂についてはほとんど知らず、批判的思考について多くを語り、想像についてほとんど知らず、論理について多くを知り、熱情についてほとんど知らない。幼稚園から大学まで、われわれは問い、議論し、分析し、批判し、論争^{ディベート}すべく訓練される。要するに、考え、考え、考えるべく！とかくするうちに、われわれの魂は死んでいく。(エルキンス 56)

では Hillman にとって「魂」の場とはどのようなところなのか、また、その回復の方途はどのように見出されるか。

われわれの区別はデカルト的である。つまり外的な手に触れられる現実と内的な精神の状態の間、あるいは身体と精神・心・霊の茫漠たる混合塊との間の区別なのだ。われわれは第三のもの、中間の位置を失ってしまった。かつてわれわれの伝統においても、他の伝統と同じように、それは魂の場所だった。想像力、情念、空想、反省の世界。身体的でも、物質的でもなく、また霊的でも抽象的でもな

いが、その両者につながれている場所である。（『魂の心理学』149）

さらに Hillman は「魂という言葉で私が意味するのは、まず第一に何らかの実体というよりパースペクティブ、何らかの事物というより事物を見る視点である」（『魂の心理学』21）とし、「イメージーションのはたらきによって現実を作りだしているときに、ある観点によって現実を体験しているときに、魂は生じてきているのである。イメージーションの働きのなかに現実が存在しない。[・・・]現実がイメージとして現れるから、イメージは魂である」（『元型的心理学』162）と指摘する。したがって「イメージ作りは魂作りの王道」となり、「魂の素材を作ることは、夢見ること、空想すること、想像すること」（『魂の心理学』73）となるのである。このように「イメージ」と「魂」の結びつきを説明する Hillman はさらに「魂」の回復の具体的な場を指し示す。

目を向けるべき第一の場所は、無意識の現象学的な場所で、下方であり、内側であるから、無意識である。[・・・]魂の場は暗い内側のしかも下の方向にあることを発見したならば、危険な航海を覚悟しておかなくてはならない。[・・・] 下降する道は [・・・] 永い年月の間制圧されてきたすべてのもの、すなわち物質、自然、女性、悪、罪、下半身、熱情、との対決であることを教えている。[・・・]つまり抑圧されたものへの回帰である。[・・・]無意識は、私たちがそこを通して魂を発見する戸口である。そこを通ると、通常の出発事が経験となり、それによって魂を受け容れるのである。それを通ると、情緒が目覚めて、意味が生氣を取り戻す。（『内的世界への探求』59-60）

Bly が Jung や神話学者の Erich Neumann の著作を読み始めたのは 60 年代末であり⁹⁾、まして Hillman を知ったのはさらに後であったことに

鑑みると、この一節と先の“Snowfall in the Afternoon”における無意識の意味をめぐる偶然の照応には驚かされる。しかし、「魂を受け容れ、それを通ると、情緒が目覚めて、意味が生氣を取り戻す」状況とはどのようにして可能になるのであろうか。そこから開けてくる次元とはどのようなものなのか。「イメージ」と「無意識」そして「魂」への道筋がこうして一本の線で仮に結ばれてきたとするならば、再び Bly の作品に照らしてみなくてはならない。

4 Silence の世界(2)

Hillman は「魂」は定義することの難しいものだとしながらも、「魂」は「意味を可能にし、出来事を経験に変え、愛によって伝達される未知の人間の要因を指すもの」(『内的世界への探求』46) と捉え、世界を意味づける「魂」の働きの重要性を指摘する。“Snowfall in the Afternoon”が「イメージ」と「無意識」との関係に示唆を与えるとしたならば、ここで取り上げる“Driving Toward the Lac Qui Parle River”では「魂」の方へと降りていくプロセスが辿られる。そこでは「魂」が出来事の隠れた意味、本質をあらわにし、単なる事象に奥深さが与えられ、内的な経験にまで高められていく。その契機は対象への愛、すなわち共感性である。これは Bly の詩の中でもっともよく知られ、解説も施されてきた作品であり、ここでは要点を絞って進めたい。

I

I am driving; it is dusk; Minnesota.
 The stubble field catches the last growth of the sun.
 The soybeans are breathing on all sides.
 Old men are sitting before their houses on carseats
 In the small towns. I am happy.

The moon rising above the turkey sheds.

II

The small world of the car
Plunge through the deep fields of the night,
On the road from Willmar to Milan.
This solitude covered with iron
Moves through the fields of night
Penetrated by the noises of crickets.

III

Nearly to Milan, suddenly a small bridge,
And water kneeling in the moonlight.
In small towns the houses are built right on the ground;
The lamplight falls on all fours in the grass.
When I reach the river, the full moon covers it;
A few people are talking low in a boat. (*Silence* 20)

おそらく“Snowfall in the Afternoon”と同じ意味合いをもつ薄暮の時間に、語り手はアメリカ中西部の広大な田園風景の中を車を走らせる。どうみてもみすばらしい田舎町の情景を眺めながら幸福さえ感じていることで、すでに語り手と外界との間に、ある種の親密さが暗示されている。Hillmanの言う「契機となる対象への愛と共感」が所与のものとなっている。やがて“loneliness”ではなく“solitude”という意志的な孤独の内部世界に虫たちの声がしみ入ってくる—“penetrated by the noises of crickets”。そして、不意に現れる橋。外界と内界、意識と無意識、主体と客体の架け橋としての、しかし、さりげなく、目立たない橋の存在

に気づき、足を止め、静かな時間に身を浸していく中で、見なれた風景は「高められた風景」(新倉 110)に変容する。闇をくぐり抜けた彼方には清澄な空間が広がっている。この詩もまた下降のイメージが横溢する。月の光は水面に降り、家々は大地に直に立ち、街灯の光は獣のように四つん這いになっている。河に浮かぶボートの中の人たちの声も低い。タイトルにある実在の河“the Lac Qui Parle River”(フランス語で「語りかける河」の意)も詩に漂う無意識的世界に響き合う。語り手は静寂へ向かって車を走らせ、事物の方から語りかけてくる地点まで降りていく。そして河そのものが伝えることばに耳を傾けるのである。コズミックな世界への感応や内面の覚醒の瞬間へのプロセスが印象的なイメージの点灯によって迎られるこの詩は“the secret corridors of the soul”を通り“calmness”へと向かう、先の Machado の詩句が静かに共鳴している。

Gary Snyder (1930-) はあるインタビューでシュールレアリスムと Bly の詩の関係について尋ねられたとき次のように答えている。

(初期のフランスのシュールレアリスムは)イメージの詩なんだ。間違っているかもしれないけれど、表面をすくいとただけだという感じがする。無意識の深みへ降りていっていないし、[...]主観的なイメージの洪水と遊んでいるにすぎない。プライが興味をもつのはもっと深い層なんだ、もっと静かな。ぼくの興味もそこにある。彼の言うように、ぼく達はその深い層を体験しなければならないと思う。[...]意識の深い層を詩に書きたいんだ。漢詩の澄み切った底よりももう少し上のところで、もう少し神話的で、元型的な詩を。(スナイダー 218-9)¹⁰⁾

Snyder がときに“Deep Image”に近い詩人としてみなされ、逆にアメ

リカのシュールレアリスムの詩人が含まれていないのはまさにここに理由がある¹¹⁾。Bly の “Deep Image”、あるいは「イメージ」はシュールレアリスムと隣接しながらも「魂」の場と深く関わっているのである。

ここで Thoreau に戻りたい。「魂」について考えるここでのきっかけは Thoreau によって与えられたが、“Deep Image” の詩人たちの表現やスタイルとは異質に思われる文人の何に対して Bly はまなざしを向けているのかを確認しなくてはならないからである。まず第一に Thoreau もまた「デカルトが『考えるもの』と『広がりをもつもの』を区別し、人間と自然のあいだの広げた裂け目を埋めようとした」（『翼ある命』107）ことがあげられる。そしてそれは意識的に外界の事物を愛する「自然と人間との交歓」によってなされていた。また Thoreau は Blake のように「二重の眼」で、すなわち実際的な眼だけではなく、想像力の眼を通して事物を見た。「眼を使ってではなく、眼を通して見る訓練」によって「自然は光輝に包まれ、物質は命を回復した存在」となることを知っていたのである（『翼ある命』146）。さらに Bly が共感するのは、『森の生活』の結末部分の「林檎の木のテーブルに産みつけられてから何年も経ったあとでかえった虫の卵」の話から魂の深みへと至る Thoreau の「メタファー的思考」（metaphorical thinking）である。

[I] love his genius at metaphorical thinking. All mythological thinking, as Joseph Campbell has so often stated, is metaphorical, and difficult to us for that reason. Thoreau noticed that an insect egg got caught inside an apple-wood table and hatched years after its secretion. Such a physical fact when seen metaphorically, carries the observer into the soul or the inner world or the invisible world. Thoreau did not throw away the fact of the insect egg and its slow hatching, but loved it as a fact, until it

carried him to the soul. He was a master of metaphorical thinking. (*The Winged Life* 112)¹²⁾

Hillman は「魂は深みを持つ。深みに入るためにイメージーションのはたらきで字義通りの (literal) 見方を殺して、メタファー的な見方をしていかななくてはならない」(『元型的心理学』164) と述べた。「イメージ」は「メタファー的思考」のことでもあり、したがってそれもまた「魂」の現れる場所なのである。「物質的事実も象徴としてとらえる」、すなわち、「比喩的思考」=「イメージによる思考」によって私たちは「魂の内へ、内なる世界へ、目に見えない世界へ近づいていくことができる」のである。こうして Bly の “Deep Image” あるいは「イメージ」の詩は Thoreau の「魂へと向かう詩学」に接近するのである。

結びにかえて

「はじめに」でふれたように 80 年代末の “What the Images Can Do” というエッセイの中で Bly は「イメージ」の持つ意味を再考する。その際 Bly が依拠したのが Owen Barfield の *Poetic Diction* (邦題『詩の言葉一意味の研究』) であった。Barfield は「科学的抽象的思考の発達によって断ち切られた人間と言語と自然界との間に成立していた幸福な有機的関係を観念的に回復する方途として、詩的想像力の働きに着目」したが (バーフィールド 296)、Bly の「イメージ」に対する考え方と基本的に重なり合うことがわかる。Bly は “The image belongs with the simile, the metaphor, the anaology.” (*American Poetry* 273) と述べた上で、「忘れられた関係」(unforgotten relationships) を詩的想像力によって呼び戻すこと、「個々の外的事物の間にある神秘的な関係をあらわにすることこそが詩人の役目」とした Barfield の理解に賛同している。Barfield の言うメタファーもまた、Bly におけるイメージに近いものと

捉えてよいだろう。またデカルトやアリストテレスによる分析的思考、カテゴリー化によって失われた「神話的イメージ」に Bly が言及していることは近年の Bly の神話への関心を予見させる。Barfield は「《神話》というのは想像力を母として生まれた《意味》の本当の子ども」（バーフィールド 245）だと述べ、「神話の具体的語いの中に、世界最初の詩語を見出すことができる。そこではまだ人間の思考の中に《自然》が躍動している。数知れぬ精霊たちがこの地上を歩いている。そこでは語の内容と指示対象の分裂が生じていず、内在的生命を失っていない。反詩的なもの、ないし純理性的なものが未だ効力を持ち始めていない」（バーフィールド 100-2）と思い描くように、Bly もまた神話におけるイメージやメタファーを通して忘れられた原初的統一を感得しようとする。70年代のあるインタビューで Bly は詩の存在の意味について次のように語っている。

Poetry I think is a healing process, and when a person tries to write poetry with depth, he will find himself guided along paths that will heal him. [...] If our society were strong and spiritually healthy, it would heal us. But our society is not like that, so each person has to do most of the spiritual work himself. (*Talking* 233)

「魂」を癒すシステムを失った社会では、「魂」を回復する仕事は一人ひとりで進めていかななくてはならない。そのような社会の中で、もし誰かのために魂に触れる詩を書くことができるならば、詩人の存在意義がある。半世紀にわたる Bly の詩的活動を突き動かしてきたのは、そのような詩人の役割に対する強い自覚なのだろう。

* 本稿は 2008 年 9 月 27 日、日本キリスト教文学会北海道支部秋季研究会（於：北星学園大学）において口頭発表をした原稿に大幅な加筆をしたものである。

注

- 1) これ以降、Bly はこの語を使用せず、単に “the image” “images” などと呼ぶことになる。Bly がこの語を使わない理由として、“deep” という形容が「心（あるいは肉体）の特定の場所を指示することが的確ではないから」と述べたことがあるが、2つの “Deep Image” が存在したことも考えられる。一方、Robert Duncan (1919-88) も “Deep Image” という語に対して次のような疑問を投げかけている—“One inch is deep, two feet deep, how deep? It’s like, what is important and what trivial? In my sense of things, there is nothing trivial, so that everything has to have depth since it relates throughout.” (Faas 70)
- 2) “In a Station of the Metro” の原詩（2行）と対訳は以下の通りである。“The apparition of these faces in the crowd, /Petals on a wet, black bough.” 「人ごみのなかに、つと立ち現れたこれらの顔／黒く濡れた枝に張りついた花びら。」（亀井俊介・川本皓嗣編著『アメリカ名詩選』184-6)
- 3) Bly は Galway Kinnell によるこの詩の英訳（詩集 *On the Motion and Immobility of Douve* 所収）を参照している。
- 4) Faas は Eliot の *The Waste Land* における “And bats with baby faces in the violet light/Whistled, and beat their wings/And crawled head downward down a blackened wall” などの詩行を引用している。これらのイメージは Bly が絶賛していたものでもある（*Talking* 263）。
- 5) Breslin はこのエッセイの中に Bly の政治心理的 (psycho-political) な現実の見方の典型を読み取り、“In 1966, Robert Bly attacked poetry of ‘the dead world,’ which studies the conscious lives of people within society but ignores the unconscious and nature, not only bad art but

as a manifestation of national aggression.” (Breslin xiii) と述べている。Bly のこのエッセイには *Iron John* や *The Sibling Society* にもつながる Bly の基本的な考えが明確に提示されている。

- 6) 訳文は以下の通りである。

「(ソローは) 若い人は文明という機械の手入れなんかやめて、魂を耕すべきだ、と信じていた。[...]魂と魂の命を求めて闘うとき、その報いとして得られるものは、名声や賃金や友人ではなく、魂のうちにすでにあるもの、すなわち、人間も動物も木々も分かち持っているさわやかさ、決して破壊されることのないさわやかさなのだ。もっとも重要な言葉は、魂だ。」(『翼ある命』10)
- 7) 1995 年に出版されたアンソロジー *The Soul Is Here for Its Own Joy* では明確に “soul” が使用されている。ちなみに Bly がこのアンソロジーに収めた詩人は Dante, Dōgen, Goethe, Hafiz, Jiménez, Kabir, Lalla, Li Po, Mirabai, Mary Oliver, Owl Woman, Rilke, Rumi, Blake, Dickinson, Donne, Hopkins, Stevens, Yeats であり、Stevens を除くと英米のモダニストはほとんど含まれていない。
- 8) Keats の原文から関係部分のみ引用する。“Call the world if you please ‘The vale of Soul-making.’ Then you will find out the use of the world.” (Keats 335)
- 9) Nelson, xxxiii.
- 10) 原文は Ekbert Fass の *Towards a New American Poetics* (218-9) を参照。
- 11) 漢詩や俳句を思わせるこうした詩と “Deep Image” を主唱する中で強調してきたシュールレアリスム的な感覚とはどう結びついているのかという質問に対して Bly は「西欧の人間がシュールレアリスティックなイメージと呼んでいるものと極東の詩とは強い結びつきがある。共感覚 (the union of senses) というのも一例である」として、芭蕉の句の英訳 “The temple bells stops, /But the sound keeps coming/Out of the flowers.” をあげ、“That’s something that an imagist couldn’t do, or

at least has not, to my knowledge, done.” (*Talking* 262) と述べている。

12) 訳文は以下の通りである。

「ぼくは比喩の天才であるソローが好きなのだ。ジョセフ・キャンベルがしばしば指摘しているように、神話的思考は比喩的なものであり、だから難しいのだ。ソローは、林檎の木のテーブルに閉じ込められていて、産みつけられてから何年もたったあとでかえった虫の卵について語っている。そんな物質的事実も象徴としてとらえると、観察者の魂の内へ、内なる世界へ、目に見えない世界へ連れていってくれるのだ。遅ればせにかえる虫の卵、という事実をソローは投げ捨てることなく、それを事実として愛し、そして魂へ到達した。ソローは比喩的思考の達人だ。」(『翼ある命』151)

引用文献

- Barfield, Owen. *Poetic Diction*. Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1973.
- Bly, Robert. *Silence in the Snowy Fields*. Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1962.
- . *The Light Around the Body*. New York: Harper & Row, 1967.
- . *Talking All Morning*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press, 1980.
- . *American Poetry: Wilderness and Domesticity*. New York: Harper & Row, 1990.
- Bly, Robert, ed. *The Fifties* No.3. Geneva: New York, 1959.
- . *The Sixties* No. 8. Geneva: New York, 1966.
- . *News of the Universe*. San Francisco: Sierra Club, 1980.
- . *The Winged Life—the Poetic Voice of Henry David Thoreau*. San Francisco: Sierra Club, 1982.
- . *The Soul Is Here for Its Own Joy*. Hopewell, New Jersey: The Ecco

- Press, 1995.
- Bly, Robert, ed. and trans. *Lorca and Jiménez Selected Poems*. Boston: Beacon Press, 1973.
- Breslin, Paul. *The Psycho-Political Muse*. London: The Univ. of Chicago Press, 1987.
- Elleman, Richard, and Robert O'Clair, eds. *The Norton Anthology of Modern and Contemporary Poetry* Vol. 2. Third Edition. New York: W. W. Norton & Company, 2003.
- Faas, Ekbert. *Towards a New American Poetics*. Santa Barbara: Black Sparrow Press, 1978.
- Keats, John. *The Letters of John Keats*. Ed. Maurice Buxton Forman. London: Oxford University Press, 1960.
- Kelly, Robert. "Notes on the Poetry of Deep Image." *Trobar* 2. 1960.
- Nelson, Howard. *Rober Bly: An Introduction to the Poetry*. New York: Columbia Univ. Press, 1984.
- Rothenberg, Jerome. *White Sun Black Sun*. New York: Hawk's Well Press, 1960.
- . "Interview." *The Sullen Art*. Ed. David Ossman, New York: Corinth Books, 1963.
- Rothenberg, Jerome, ed. *Poems from the Floating World* Vol. 3-4. Hawk's Well Press, 1961-2.
- Quasha, George & Jerome Rothenberg, eds. *America a Prophecy*. New York: Vintage Books, 1973.
- エイヴンズ、ロバーツ『想像力の深淵へ』森茂起訳、新曜社、2000年。
- エルキンス、デーヴィッド・N.『スピリチュアル・レポリューション』大野純一訳、星雲社、2000年。
- 亀井俊介・川本皓嗣編著『アメリカ名詩選』岩波文庫、1993年。
- 河合隼雄他『河合隼雄全対話II』第三文明社、1989年。
- 川本皓嗣『アメリカの詩を読む』研究社、1998年。

スナイダー、ゲイリー「詩と仏教」(杉山和芳訳)、『ビート読本』思潮社、1992年。

バーフィールド、オウエン『詩の言葉—意味の研究』松本延夫・秋葉隆三訳、英宝社、1985年。

ヒルマン、ジェイムズ『自殺と魂』樋口和彦・武田憲道訳、創元社、1982年。

——『内的世界への探求』樋口和彦・武田憲道訳、創元社、1990年。

——『元型的心理学』河合俊雄訳、青土社、1993年。

——『魂の心理学』入江良平訳、青土社、1997年。

ブライ、ロバート編著『翼ある命』葉月陽子訳、立風書房、1993年。